悪魔は優しく笑う

天崎　剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔は優しく笑う

【Ｎコード】
Ｎ１７１７Ｄ

【作者名】
天崎　剣

【あらすじ】
住む場所も、金も、食うものもなくなったクリスマスイヴの夜。比佐男は高校の同級生、明徳に再会する。互いのこれまでを話すうちに、比佐男は、己の犯罪歴を語っていくこととなる。【完結】

1

寒空の星々が、溢れるネオンの光に遮られ、消えそうなほど弱い光で街を照らす。乾いた風は容赦なく吹き荒(すさ)び、薄手のジャンパーで寒さをしのいでいた比佐男の肩を掠(かす)めた。思わずぶるぶると体が震え、くしゃみをひとつ。比佐男は鼻水がつうと伝うのを、袖で拭い、目を瞬(しばたた)かせる。

今日はクリスマスイヴ、比佐男の懐とは裏腹に、世間は年末商戦に明け暮れている。着飾った男女が腕を組み、賑(にぎ)やかに闊歩するのを、彼は恨めしく睨(にら)んだ。カラフルなイルミネーションが眩しく、表通りのビルディングや並木はお祭り騒ぎ。鈴の音とクリスマスソングが、通りのあちこちで乱発し、あちらではケーキを売る声、こちらではプレゼントのセールの呼び声。どこもかしこも浮き足立っている。

比佐男はクリスマスの気配を避けるように、裏通りへと足を向けた。

家賃払えず、住む部屋を引き払って早一ヵ月。最近流行りのインターネットカフェを転々とし、気がつけば財布は空だった。今晩の飯も、手に入る当てがない。三日前から風呂にも入れず、ボサボサ頭の髭面。とてもじゃないが、表通りを堂々と歩ける風体じゃない。

裏通りをふらふら歩き、ただ時間が過ぎるのを待った。ネオンの鮮やかな光が路地に漏れ、赤や青、緑に黄色と様々に変化していくのを、ぼうっと見つめながら、疲れきった両足を、せっせと動かしていく。飲み屋やレストランの厨房から漂う、うまそうな肉の匂い、温かな鍋の香りが嗅覚を刺激し、空っぽのお腹がぐうと鳴った。動けば動くほど、腹が減るが、じっとしていると、どうしても寒くなる。歩みを止めれば、このまま、死んでしまうんじゃないかというところまで、追い詰められていた。

ホームレスになるのは時間の問題だろうな、と、辿り着いた駅裏

広場のダンボールの軒を眺め、溜息を吐く。収入も、蓄えも無くなった今、ネカフェにいるか、ダンボール下にいるか、多分、彼らとはそれだけの違いだ。

街灯頼りに、人気の無い、公衆便所脇のコインロッカーに辿り着くと、比佐男は、一張羅の黒いジャンパーから、鍵と数枚のコインを取り出し、一番右上の、気に入りのロッカーを開けた。使い込み、あちこちシワだらけ、破れかかった紙袋に、着替えが数着ある。風呂に入れぬまま、下着も何日か替えていなかったことを思い出し、彼は別のレジ袋に入った下着に手を伸ばすも、止めた。金が無く、コインランドリーにすら行けなかったのだ。ここにあるのは全て、汚れ物。来るだけ無駄だった。他の荷物は髭剃り、空のリュック、やはり代金払えず使えなくなった携帯電話。金目のものの無さに愕然とし、比佐男は再び鍵を掛けた。

「今日は、どこで寝るか……」

ぼそりと呟いた比差男の声は、弱々しく、頼りない。

三十五歳の割りに、白髪の多い頭をかき上げ、彼は空を見上げた。都会の真ん中でも、この公園からは少しだが星が見える。街の光に負けて、自らの存在を誇張出来なくても、星は今日もいつものように、輝き続けているのだ。

ほうと吐き出した比佐男の白い息で、視界が曇った。両手のかじかみを少しでも和らげようと擦(こす)り合わせ、口を覆って、更に一息、ふうと吐く。

世界中、クリスマスだと祝っていても、自分にはプレゼントどころか、家も、金も、食うものもない。もしかしたら、年もまともに越せずに――、いや、越したとしても、生きる意味も見出せぬまま、ただ命の尽きるまで呆然と生きながらえるのだろうかと、比佐男は思った。

駅裏公園から続く並木通りを抜け、小さな雑居ビルの集まる飲み屋街へと向かう。その先に、いつものネカフェがあるのだ。辿り着きさえすれば、ドリンク飲み放題だ。残り数百円の所持金で、とに

かくいられるだけそこにいて、横になりたい、外で寝泊りするのは、あくまで丸っきりの一文無しになってからだと、比佐男は密かに決めていた。

一人、悲愴な面持ちで歩き続ける比佐男に、後ろから誰かが声を掛けたのは、そんな時だった。

「おい、比佐男、比佐男じゃないか」

久しぶりに、誰かが自分の名前を呼ぶ声を聞いた。比佐男はどきりとして、ゆっくり振り向いた。

看板と飲み屋から漏れる明かりに照らされたその男は、

「やっぱり比佐男だ」

弾んだ声で手を振った。

身なりのよい男だ。白いカシミヤのコートが眩しい。きっちり髪を固め、ビシッと決めたスーツ姿、すらっと背が高く、姿勢がよい。

全く見覚えのない男に、比佐男は聞き違いかと踵(きびす)を返した。

「おいおい、比佐男、水臭いな。俺だよ、明徳(あきのり)だよ」

男は足早に比佐男に駆け寄り、ぽんと肩を叩いた。

「明徳だって？」

比佐男ははっとして、足を止め、男の顔をまじまじと眺めた。

街灯下のサラリーマンは、確かに、比佐男の記憶にいる男、明徳に似ていた。すっきりとした目鼻立ち、黒く、しっかりとした眉、長い睫毛(まつげ)。

「お前、高校の同級の……、明徳か？」

ようやく思い出した。比佐男は顔を明るくした。

明徳は、友人の少ない比佐男の、唯一の理解者だった。

高校二年の時、両親が離婚し、父に引き取られた比佐男は、荒れに荒れていた。情緒不安定でとげとげしく、近寄るもの全てを傷つけた。家庭内暴力、傷害事件、万引き、カツアゲ、タバコ、薬、何でもやった。心が満たされず、非行を繰り返す比佐男に、明徳は声を掛けた。

どこかの会社社長の息子だという明徳は、面倒見がよく、誰にで

も優しかった。気が利いて、繊細で、女性にももてるタイプというやつだ。頭がよく、スポーツ万能、剣道部の主将も務めていた。
明徳は比佐男を励まし、まっとうな道へ進むよう、促した。欠席がちだった比佐男が、無事に高校を卒業出来たのも、明徳が手取り足取り、勉強を教えてくれたおかげ。比佐男の非行は減り、性格もある程度改善した。
明徳にとって、それは万人に対しての優しさだったのかもしれない。だが、比佐男にとっては、特別で、かけがえの無いものだった。明徳が自分を、親友として見てくれているのだとさえ、思っていたのだった。
「会社帰りなんだよ。比佐男、どうだ、一杯」
昔と同じように、明徳はニコニコしながら、比佐男の肩に腕を回してくる。
懐かしい感覚だったが、決まり悪い。風呂に入っていない、体臭が気になって仕方ない。髭も、髪の毛も、身なりも、あまりにみすぼらしいのが恥ずかしい。かえって、びりびりと緊張し、比佐男は肩をすくめた。
「いや、俺は」
金、無いんだよ、と、言いたかったが、言えなかった。
香水のいい匂いのする明徳は、昔からそうだったが、自分とはやはり違う世界にいるのだなと、思い知らされるのが嫌だった。それでも明徳は、そんな比佐男の気持ちも知らずに、
「久しぶりなんだし、奢(おご)ってやるよ。丁度、行きつけのバーがあるんだ」
比佐男の肩を抱きかかえたまま、ぐいぐいと強引に歩き出した。

2

飲み屋に行くのは、かなり久しぶりだ。羽振りのよかったときは、毎日居酒屋に通ったが、それも過去の話。ネカフェ難民状態の比佐男には、アルコールなんて、高嶺の花なのだ。悔しいながらも、酒にありつけるという嬉しさに、ひとまず心を許す。今日の飯の心配は、とりあえずしなくてよくなった。その代わり、明徳とのぎこちない会話を続けなければならないのだが。

路地の奥、「ＰＲＩＤＥ」というバーに案内される。シックな赤レンガ造りの外観、ガス灯を模した外灯。中に入ると、淡いオレンジ色に彩られた室内に、長い一枚板のバーカウンター、口ひげのマスターが一人、シェーカーを振っている。

明徳はマスターに軽く挨拶をすると、友人だと比佐男を紹介し、まん前に座った。午後八時、店内に他に客は無し。アンティークとワインボトルがセンスよく配置された棚に目を奪われ、比佐男はしばし沈黙した。

「再会を祝って、最初の一杯は、どうする？」

明徳の声にはっとして、視線を戻す。

「ま、任せるよ」

比佐男は慌てて、そう答えた。本当は、カクテルなんて、よくわからないのだ。

「マスター、彼に、スクリュー・ドライバー。俺にはジン・トニック」

五十代のマスターは、渋みを効かせて柔らかく笑い、頷いて、タンブラーを二つ、手元に置いた。アブソルートウオッカが、氷の入った片方のグラスに注がれ、カチンカチンと小さな音を立てる。更にオレンジジュースがゆっくりと継ぎ足され、ぐるぐるとグラスの中で旋回する。

「どうぞ」

スクリュー・ドライバーのグラスが比佐男の目の前に現れる。
酒だ。渇いていた喉に、ぐっと唾が溜まった。甘いオレンジの香りが、限界までお腹を空かせた比佐男の鼻に潜り込み、これでもかと刺激してくる。
明徳のジン・トニックが出来上がると、ささやかな、乾杯の儀式。
「十七年振りの、再会に」
カチン、と、二つのグラスが音を立てた。
比佐男は、待ってましたとばかりに、ぐいぐいとカクテルを喉に流し込んだ。食道を通り抜ける、アルコールと柑橘の爽やかさ、うまい、うまい。ごくりごくりと、喉仏を鳴らし、ぐっと目を閉じて、一気に飲み干していく。そして、氷だけになったグラスを、テーブルに勢いよく、着地させると、ぷはーっと、大きく息を吐き出した。
明徳とマスターは、比佐男の飲みっぷりにあっけにとられ、ぽかんと口を開けていた。
比佐男は、しまったと目をそむけ、とっさに、「あ、あまりに美味かったもんだから」と苦笑いする。
「それはそうと、明徳、お前は今、何してるんだ？」
何とか自分から興味を逸らそうと、比佐男は話題を振った。
「ああ、俺は……」
明徳は両肘をバーカウンターにのせたまま、酒を一口、含むと、遠慮深そうに、
「親父のやっていた、金融会社を引き継いだのさ。若社長ってやつ。荷が、重いけどな。しかもこの不景気だろ。問題が山積みなんだよ。それでこの時間まで仕事を」
顔を曇らせ、いつに無く真剣な顔で、明徳は俯(うつむ)いた。
社長という言葉に、比佐男は嫉妬感を覚えた。やっぱり、明徳は自分とは違う。インテリ男なんだ。たまたま高校生の頃、あの校舎で同じクラスになっただけで、最終的には全く違う道を歩むことは、当時から目に見えていた。交差した二人の時間が、よじれ、再び今日、出会ったとしても、そのまま並行することなく、遠くに過ぎ去

ってしまうのだということも、比佐男にはなんとなく、理解できた。
「そういう、比佐男は？　高校卒業してから、すぐ、いなくなっただろ。随分探したんだぜ」
明徳の台詞と前後して、二杯目のスクリュー・ドライバーが比佐男に届く。
「実家、出たんだよ。耐えられなくなって」
差し出されたチーズの盛り合わせを摘みながら、比佐男は昔のように、明徳にこれまでのことを話し始めた。
比佐男が家を飛び出したのは、酒乱の父親が原因だった。元々酒癖が悪い父親が、酒に溺れていったのは、不景気で建設会社を首になってからだ。四六時中酒が離せなくなり、仕事を探そうともせず、酒と金ばかり無心していた。
嫌気が差した母親が、年の離れた比佐男の妹を連れて出て行ったのは、高校二年の春。思春期の比佐男には、とても耐えられない現実だった。父と二人、衝突し、感情の行き場を失った比佐男は、家庭内暴力に走った。時には父を殴り、傷付け、また、殴られ、張り倒された。
明徳が現れたのはそんな時。その優しさ、心配りに触れ、一度は穏やかな心を取り戻した比佐男だったが、卒業と同時に打ち切られた絆は、彼の正常な日々を一変させた。
飲兵衛の父親は、有り金使い果たし、重度のアルコール依存症に成り果て、入院してしまったのだ。多額の医療費が、無職の比佐男に圧し掛かった。消費者金融から借金をし、繋いだが、返す当てが無い。短期アルバイト、日払いの建設作業、真面目に働いたこともあった。しかし、膨らんでいく借金の山を崩すのは、容易ではない。
「もう、時効だから、言うけどさ。俺はあの時、あまりの苦しさに、盗みを働いたんだ」
比佐男はそう言って、深く息をすると、ぐびぐびとカクテルを流し込んだ。
金持ちそうな家を狙い、数十万の現金を盗み出す。二軒、三軒、

繰り返しているうちに背徳心が消え、父親のことで塞ぎ込んでいた気分も晴れた。働かなくても、簡単に金は手に入る。その感覚、興奮というものを、一度知ってしまうと、もう、元の真面目な生活には戻れない。

「俺はそのまま、父親を病院に残して家を去った。同じところで盗みを繰り返していたら足がつくし、あんな家には戻りたくなかったからな。とにかく、生きるためなら、俺は何でもやったんだよ」

比佐男の右隣で、明徳は静かに、彼の話を聞いてくれた。比佐男がずっと、誰かに聞いてもらいたいと思っていた過去を、自身が聞くのが、運命だったかのように、ただ静かに、時に相槌を打ちながら。

そして比佐男にとっても、高校の頃と変わらない、明徳のそのスタイルが心地よかった。すらすらと何の抵抗も無く、何事も口から出ていってしまうのだ。

客の増えないバーでの会話は、続いた。

店内のオレンジ色の照明が、比佐男の語りを引き立て、セピアに褪せた記憶へと繋いでいく。幻想のように流れる、柔らかいジャズの音楽が、麻薬のように感覚を狂わせ、比佐男は自分の中で完結させようとしていた事件まで口に出してしまったのだった。

3

「あれは、十年近く前のことだ。盗みに入るより、もっと簡単に金が手に入ることを、俺は知った。高利貸しだよ。闇金。０９０金融、聞いたことあるか？　携帯電話さえあれば、簡単に金をぶん取れる。街の消費者金融や、クレジット会社から溢れた、ブラックリストのやつらが、どんどん雪崩れ込んできた。景気が傾き、株価は史上最低を更新。リストラ、自殺が社会問題になっていた、あの頃だよ」

酔いが回った比佐男は、ぼうっと麻痺した頭を左手で抑えながら、カウンター上のチーズとクラッカーを交互に頬張った。空いていた腹を黙らせるため、がつがつと食い進めながら、彼はまた、話を続ける。

「人間てやつはさぁ、やっぱり、金がないと、生きられないんだよ。わかるか、明徳。お前がやってる会社の顧客はどうか知らないが、俺んとこに来てた客は、金の亡者みたいだった。本当に、極限状態で、危ないとわかっていながらも、やつらは来る。そうして、俺たちにごっそり根こそぎぶん取られて。……馬鹿だよな、無知だよな。こっちは、最初から、外道だったのに」

瞼上(まぶた)げた比佐男の目は、潤んでいた。体の奥からこみ上げてくる何かを、必死に押さえ込むように、肩を震わせ、明徳を見た。顔をしわくちゃにし、すがるような目で、一言、

「死んだんだよ、じいさんが、一人。首吊ってさ」

比佐男は両手で頭を抱えたまま、怯えるようにカウンターに伏した。

うう、と、すすり泣く声。

明徳は、黙って、彼の背を撫ぜた。

「あのじいさんの、家の、居間の梁にさ、ロープ結わえて。見たときにはもう、死んじまってたんだ」

「……比佐男、落ち着け。もういい」と、明徳。

比佐男は顔を上げて、明徳の手を払った。キッと睨みつけ、今までの鬱憤を晴らすように、明徳の襟元を鷲づかみにし、怒鳴りつけた。

「『もう、金は無い。返すことは、出来ない』なんて、遺書、書かれてみろ！　――俺は、心底震えたよ。不幸なんて、見慣れてるはずだった、なのに、なのにだよ。たった一人、見知らぬじいさんが、俺の目の前で死体になって現れたとき、自分以上の不幸が、この世にはあることを知ってしまったんだ。そしてそれは、他でもない、俺自身が招いてしまった事だってことも」

大声でわめき散らす比佐男を、明徳はまた、静かになだめた。

「比佐男、お前が自分で、手を下したわけじゃない。時効なんだったら、もう、過ぎたことは忘れて……」

「時効なんて、人間が勝手に作った言葉だろ。罪には、時効なんて、本当はないんだよ」

明徳の胸倉から手を離し、グラスを空ける。胸につかえていた事件の告白と、久しぶりのアルコールに、ますます比佐男の脳ミソは混乱していった。

カウンターに掛け直し、マスターにウイスキーをストレートで、と注文する。比佐男は、出されたグラスをひょいと持ち上げ、ぐびぐびとあおった。唇からだらしなく酒が零れ、襟を汚すのも構いなしに、グラスを傾ける。

自分の姿が、かつての父親と被さるのを知りながらも、比佐男は飲んだ。飲めば、心中全て吐き出せば、心の中に無限に広がるこのもやもやが晴れるのだ。そうできるなら、酒の力も、明徳の力も、借りられるだけ借りて、すっきりしたいと、そう思った。

どうせ、恵まれぬ運命だったのだ。不幸な家庭に生まれ、不良になり、犯罪に手を染め、自分のせいで、人が死んだ。

「一度、裏社会を知ったやつが、明るい場所で生きることなんて、できない。俺は、結局その後も、いろんな詐欺をやった。オレオレも、振り込めも、仲間を見つけて、盛大にやった。暴力団に絡まれ、

死にそうになったこともある。そんな俺が、唯一、幸せだったのは、もしかしたら、お前のように話を聞いてくれる友人が、いたということなのかもな」

空になった、何杯目かのグラスをカウンターにそっと置き、比佐男は静かに笑った。

言いたいことを全て話し終えた比佐男は、ささやかな満足感に満たされていった。ここ、何年間も味わえなかった、穏やかな気持ち。戻らない過去を後悔するつもりなどなかったが、話し終えてみれば、なんてつまらない人生だったんだろう。

軽快なジャズと、酒、酒落たバーでのひと時は、比佐男を夢の世界に誘惑する。眠気が襲い、うつらうつらとしてきた。カウンターの上、時計の針は、十一時半、もうすぐ、イヴの夜が終わる。

途方に暮れ、彷徨っていたところに、もしかしたら、サンタクロースが気まぐれなプレゼントをくれたのかもしれないなどと、比佐男は思い始めた。何もない自分に、せめてと、明徳という男を寄越したのだろうかと。

酔いつぶれた比佐男の隣、グラスに残る氷をカラカラと回しながら、黙って話を聞いていた明徳は、徐(おもむろ)に体をねじり、比佐男に向けた。カウンターに右肘を付き、ぐいと前身を倒して、比佐男に囁く。

「本当はな、偶然なんかじゃないんだよ。今日出会ったのは」

その一言が、妙に耳に残り、比佐男はがばっと顔を上げた。酔いが醒めたような顔で目を白黒させる比佐男を、明徳は不敵に笑って見つめていた。

「ネカフェ難民、って言うんだっけか。笑うよな。本当にいるなんて」

「え、ちょ、ちょっと待って。俺、いつ、ネカフェなんて」

話してもいないことを知っている明徳に、比佐男は動揺した。

「『一度、裏社会を知ったやつが、明るい場所で生きることなんて、できない』？　ホントに、そう思ってたのか、比佐男。思っていたから、足を洗って、難民なんかに成り下がったのか？」

唇の端を吊り上げ、頬の肉をずらして、見下すように、明徳は笑った。それは、比佐男の知っている、明徳ではなかった。漆黒の羽を生やした悪魔のように、全身から黒い気配を漂わせて、そこに君臨していた。

比佐男は慌てふためき、カウンターの椅子から転げ落ちた。一張羅のジャンパーから、なけなしの数百円が無残にも床に転がり、消えていく。

「馬鹿だな、比佐男。そんなんだから、生き方に失敗するんだよ。せっかく、こっちの道に来ないように、昔あんなに世話したのに。やっぱりお前は、こっちの世界にやってきた。半端に足を突っ込むから、入りきることも出ることもできずに、こんなところでつっかえて」

「あ、明徳、何言ってんだよ」

脂汗がじっとりと、比佐男の手のひらに、足の裏に、額に浮かび上がる。顔が火照り、汗がどっと噴出す。

「こんな話してさ、堅気のやつならきっと、お前を警察に突き出すぞ。俺がどうして、何も言わずに話を聞いていたのか、考えもしなかったのか」

明徳はニヤニヤと笑いを浮かべ、懐に手をやった。カシミヤのコートの中から、黒光りした硬いものが、ゆっくりと姿を現す。

「け、拳銃……！」

銃口が次第にこちらを向き、比佐男の体は極度の緊張で、硬直した。

「継いだ親父の会社ってのはさ、つまり」

明徳は自分の頬に、左の指で上から下に、数字の一の字を書いた。

「こういうことだよ、わかる？　闇金だの、詐欺だの、結局、どこに繋がっているのか、比佐男、お前はわかっていたんだよな。わかっていて、やっていたんだよな。逃げても無駄なんだよ。お前を追っていた、暴力団のドンてのは、俺なんだから」

比佐男は両手を頭上に上げた。上げたまま、ばたりと仰向けに倒

れた。何がどうなっているのか、急には理解できない。天井の換気扇が、ゆっくり回るのを、目で追って、頭の中を整理しようとした。比佐男の枕元に、明徳とマスターが一緒に歩み寄る。この店も、明徳とグルだったのかと、今更ながら思う。

「うまい話なんて、この世にはない。比佐男が一番、知ってるはずじゃないのか。さあ、どうする。このまま逃げ続けるか。それとも、こっちの世界にどっぷりはまって、甘い蜜をすするか。選択の余地は、ない、よな？」

明徳は静かに笑い、倒れる比佐男の頭上に、ウイスキーグラスを差し出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1717d/

悪魔は優しく笑う

2010年10月8日15時10分発行